幽玄馬琴源作

椿説弓張月

ちんせつゆみはりづき

三島由紀夫

中公文庫

中公文庫 椿説弓張月

昭和五十年十月二十五日印刷
昭和五十年十一月十日発行

著者 三島由紀夫

発行者 高梨茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二丁目一番地
振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

©1975

中公文庫

椿説弓張月

三島由紀夫著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目録

上の巻　11
伊豆国大嶋の場　11
中の巻　30
讃岐国白峯の場　30
肥後国木原山中の場　34
同じく山塞の場　38
薩南海上の場　47

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

下の巻 56
琉球国北谷斎場の場 56
北谷夫婦宿の場 64
運天海浜宵宮の場 78
「弓張月」の劇化と演出 85
「椿説弓張月」の演出 93
歌舞伎の脚本と現代語 97
解説 磯田光一 102

曲亭馬琴原作
三島由紀夫作

椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）

役名

鎮西八郎源為朝
八町礫紀平治太夫
高間太郎原鑑
妻　磯萩
簑　江
白縫姫
武藤太
舜天丸冠者
大臣利勇
王　子
寧王女
陶松寿
阿　公

猟夫　山平
同　林平
同　滝平
腰元　千草
同　山荻
同　木実
同　葛木
同　椎葉
庄屋
郎党
忍びの者
若衆大勢
軍兵大勢
烏天狗大勢

崇徳上皇の霊
左府頼長の霊
為義の霊
為朝の子　為頼
同　島君
鶴
亀
巫女
漁師　太七
同　源五
同　弥三
同　岩次
同　玉市
同　鯛三
同　鯖太
同　烏賊八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

役名

鎮西八郎源為朝
八町礫紀平治太夫
高間太郎原鑑
妻　磯萩
簑　江
白縫姫
武藤太
舜天丸冠者
大臣利勇
王　子
寧王女
陶松寿
阿　公

上の巻

伊豆国大嶋の場

（本舞台、上手に火山の遠見。
中央岩組の洞の小祠の前に小さき鳥居、岩組のよきところに松、これに大弓を掛く。
奥は一面海の遠見、下手に海中の覇王樹岩〔仕掛〕、すべて伊豆国大嶋の体。
源為朝、金襴の鎧直垂に大口袴を着け、紫裾濃の鎧を著て、黄金作りの太刀を佩き、祠の下に控えいる。
郎党の装にて、八町礫の紀平治、高間太郎、左右に下に居る。
この前、浅黄幕。
波音、千鳥笛にて幕あく。
すぐ床の浄瑠璃になり）

〜君道誰か易きと云う、臣義本自難しとやら、往時保元の乱に敗れ、君は白峯八重葎、臣は大嶋八重波に、幽明隔つる捨小舟、曳くに甲斐なき強弩の末、時しも嘉応二年の秋、鎮西八郎為朝が、とぶらう院の御忌日、仕うる者も流れ木の、八町礫の紀平治太夫、高間太郎原鑑、うやまい篤く

（ト　置浄瑠璃の「八重波に」にて波音、浅黄幕を切って落す。千鳥笛、波音。皆々瞑目の体。各々ヨビにて顔を起す）

紀平治　おそれながら我君には、流所に在って故忠を忘れず、八月二十六日の、新院の御忌日には、御具足もきらびやかに、弔いたもうお志。

高間　時世渝らぬ松柏、このおん手向けを見そなわさば、院の御無念も晴れ申さん。

為朝　いやとよ、御無念晴らさずそのままに、流人の島に朽ち果てんは、武士に似げなき不忠の恥、新院薨去と聞えてより、願いは一つ白峯の、おん陵に詣でしのち、その場を去らず腹掻ッ切り、

〜潔く相果てんこと。

十年を経たる遠流の身には、武勇もむかし、武功も徒、ハテ茫々たる世の中じゃなア。

〜主従共に手をとって、憂いに沈むそのところへ

〽浜育ち、裾も荒磯に濡れそめし、為朝千鳥簑江が、まだ潮馴れぬ都鳥、高間太郎が妻磯萩を、伴いかえる磯づたい、広鰭物を荷わせし、島人どもに自慢顔、

簑江　コレサ島の衆も御覧じませ。日ごろ見馴れし島長も、年に一度のお主の回忌、鎧直垂の装束姿、なんぼう立派で凜々しゅうて、こちの人とも呼びにくい。磯萩どのも高間様の殿御ぶりに二度惚れかいの。

磯萩　イエイエ、武者姿は見馴れてある。昔に戻ったと見るばかり。

簑江　御武家育ちは固苦しい。恋女房はそれらしゅう、惚気三昧が気楽じゃわいなア。

（ト　二人顔を見合せ、笑う。一同、本舞台へ来る）

モシ、こちの人、アノ、イエ、御大将の為朝どの、お社のお祭に、島をあげての献じ物、山の幸はあらねども、海の幸の大漁節、歌うて御霊を慰めの、上手を連れて参じました。ソレ、皆の衆。

皆々　心得ました。

〽ヤットコナ、海老は緋縅、鯛は小桜縅でヤットナ、太刀は太刀魚、鰐は矢筒、鱚は強弓、物具づくしで、大漁祝うた、

ヤットコナ、ヤットセイ

（ト　歌に合せて、魚類を神前に運ぶ）

〻神饌山をなしたれば、

為朝　これも故院の御遺徳ならん。鮠江、村の衆にこれなる神酒、振舞うて進ぜよ。

鮠江　アイ、アイ

〻と答えて、甲斐甲斐しゅう、磯萩共々もてなせば、

漁師太七　鮠江様には差合なれど、お父上の代官どのが、為朝様の御威勢におそれ、この大嶋より逐電なされ、

漁師源五　流人の大将が後釜とは、神武以来きかぬ珍変、

漁師弥三　それというのも島人に、お情あつき為朝様、

漁師太七　昔にかわる御治世に、民の憂いも凪ぎわたる、

源五　税も軽き安堵のなりわい、

弥三　年に一度のお祭には

太七　お礼も言いたし、大将の御無聊も慰めたし、何ぞよい思案は

一同　ないものかいのう。

鮠江　オ、、そうのうては叶わぬところ。私も曳綱を取ろうほどに、若い衆、手助けしてくりや。

若衆一同　心得た。

〽何やら囁き引ン出す、祭り屋台の機械人形、簓江が曳く友綱も、紅おしろいの浜木綿、見れば童の人形に、身をやつしたる為頼、島君、為朝は打ちおどろき、

為朝　吾子ではないか。

為頼
島君　父様。（ト　礼をする）

簓江　アコレ、そなたは今日はからくり人形、口を利くまい、動くまいぞえ。ハイハイ、これなるは今を去る十五年前、院宣受けて為朝どのが、黄金の牌を着けたる鶴を、琉球旧虬山に求むる道中、寧王女に行き会うて、秘蔵の珠と引換えに、のぞみの鶴を得た段々、為朝どのよりきいたまま、狂言に仕組みし一景。皆の衆も見物しや。とざい東西。

（ト　床の浄瑠璃の掛合になり）

人形の寧王女　御身にありては一顆の珠なり。われにおいては千乗の位に換る璽ぞや。琉と球との二つの珠、一つは失せて国の乱れ。正しく失せたるその珠を、この寧王女に賜びたまえ。

人形の為朝　彼珠はわが本国にて得たるもの、求めたもう玉璽とやらんにてはなし。われは日本の商人也。貨はすべて失いて、のこるは一つの珠なるを、これさえおん身に進らせなば、何をもてわが索むるものと換え候うべき。

人形の寧王女　求むるものは何なりと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com